



文献の収集について

獣医学部助教授 大林正士

本誌5巻2号(71)に、「文献の調査・利用について獣医学部院生と懇談会」の記事があった。この種の催が開かれる理由の一つに、近年の急速な情報量増加があり、実際に文献入手に費される労力は大きい。筆者の専攻は寄生虫学であるが、専門誌以外に動物学、獣医学、医学関係刊行物も対象になり、教室、学部、学内他学部では足らず、他に求める機会が多い。とくに苦勞するのは他生物学分野同様、分類学関係の仕事に際してであり、以下この点について経験を述べてみたい。

家畜、人体および野生動物から採集された標本が同定の対象になるが、文献として単行本と雑誌(別刷を含む)があり、その中から必要なものを探すことになる。

ソ連で1950年頃から、グループ別に寄生虫分類学シリーズが刊行され、当時までの公表種の記載を網羅している。しかし、未刊部が多く、その後の新種も多いので、吟味すべき面が少くない。雑誌類は、専門誌約30余を購読、多くはバックを揃えてあり、この範囲内の文献は眼を通し得る。他に Check List 類が単行あるいは付属して出ており、同定に利用して便利である。

別刷は、教室業績との交換(約200箇所)を主体に集め、約6千部程に達している。受入順に親カードを作り、コピー2部を著者別・事項別に整理しているが、古いものは少い。総説類は有用である。

抄録誌は利用度が高いが、英国の Helminthological Abstracts はその一つである。1932年創刊で、最近筆者も日本語文献に関し分担している。問題は収録数増加で、'74年は5,381篇、抄録を短縮せざるを得ない。同誌は、文献集の別刊や複写奉仕もしている。

次に米国の Index Catalogue of Medical and Veterinary Zoology が文献所在の探索上利用価値が高い。1932年創刊、'52年まで ABC 順著者別に発行、以後年刊となり、最近は数冊の事項別分冊が併せて出されている。さらに著者別を親本にしてグループ毎の Index が企画されてきた。およそ寄生虫学関係の内外文献は殆んど洩れなく採録され、年代もリンネ以前16世紀に及んでいる。

以上は概ね文献の探し方といった事で、そのあとは内外図書館その他を介しての、スムーズな入手法となるわけである。

◆ 会 議

第74回 図書館委員会

<と き 昭和50年6月20日(金)>

<ところ 附属図書館会議室>

1. 昭和50年度歳出実行予算(案)について
2. 閲覧個室(第2種)選考について
3. 報告事項
4. その他

第75回 図書館委員会

<と き 昭和50年9月30日(火)>

<ところ 附属図書館会議室>

1. 閲覧個室(第1種, 第2種)選考について
2. 学部共通図書購入について
3. 報告事項

第41回 教養分館委員会

<と き 昭和50年7月10日(木)>

<ところ 教養分館長室>

1. 昭和50年度「教官指定学生専用図書」の選定について
2. その他

第18回 北海道地区大学図書館職員研究集会

去る8月8日標記研究集会が本学の当番で、道内の国公立大学図書館職員約100名の参加で盛会裡に実施された。

午前の個人発表は、(1)ISBDについて(北大 宇野弘純)、(2)「ライブラリー・カレッジ」について——東京大学図書館情報学セミナー(49年第1期)における研修レポート——(教育大 佐藤貞司)、(3)公立大学の図書館長、事務長の権限・職責について——主として財務管理面における——(札幌医大 三浦勉彦)、(4)書籍の保全について(藤女子大 久保田晴子)。午後は、北大早川図書館長の特別講演の後、事例報告として、(1)キーワードと件名標目(北海学園大 木田橋喜代慎)、(2)京都大学におけるWIC(Written Informal Communication)活動(北大 坂東慧)が行われた。

第25回 北海道地区大学図書館協議会総会

<と き 昭和50年8月29日(金)>

<ところ 札幌医科大学>

標記協議会総会は、札幌医科大学宮崎図書館長が議長に選出されて議事が進められた。報告事項として、1)北海道地区所在外国雑誌総合目録の会計報告、2)第18回北海道地区大学図書館職員研究集会について、3)各館界の動行について国公立からそれぞれ報告があった。

協議事項として、1)和洋バックナンバー備付けの情報交換について、これは17館の賛成があり、ただちに情報交換を行なうこととなった、2)学術雑誌総合目録1975年版北海道地区版(仮称)作成について、14館の賛成ありワーキング・グループを作り検討することとなった、3)第26回北海道地区大学図書館協議会総会は酪農大学で、第19回北海道地区大学図書館職員研究集会は小樽商科大学で明年8月それぞれ開催することに決定した。

全学図書掛長連絡会議

<と き 昭和50年9月19日(金)>

<ところ 附属図書館会議室>

1. 昭和50年度会計検査院実地検査について：本年度は外国雑誌前金払の見込精算について特に検査があ

り、年度区分を乱すことのないよう指摘があった旨の報告があった。

2. 昭和51年度前金払外国雑誌の予約について：このことについて50年度の会計検査の結果も考慮し、万全を期すため、小委員会を文・経・理・工・獣医の各学部と低温科学研究所及び附属図書館でつくり検討することとなった。

第3回 日米大学図書館会議

日米大学図書館会議は、第1回1969年5月東京で、第2回1972年10月ウイソコンシン州ラシーンで開催され、今回昭和50年10月28日から10月31日まで4日間にわたり、国立京都国際会館で開催された。

この会議には、日米大学図書館関係者（米国側約20名、日本側約300名）が参集して、当面する大学図書館の問題のうち、今回は“大学図書館の相互協力システムとその課題”について、各発題者からの問題提起と、熱心な討議が行なわれた。日程及びテーマは次の通り、

第1日： a. 基調報告

- b. 図書館の全国的ネット・ワーク — その現状と将来 —
 - 1. 図書館の全国的ネット・ワーク — その現状と将来 —
 - 2. アメリカにおける図書館情報サービスの国家的計画
 - 3. アメリカにおける専門図書館のネット・ワーク
- c. 主題別の全国的ネット・ワーク
 - 1. 農・医学関係の図書館活動の全国的ネット・ワーク
 - 2. 経済学・法学分野におけるわが国の大学図書館の相互協力

第2日： 午前中は第1日に続いて全体会議午後は第1、第2の部会に別れて討議された。

- a. 図書館協力活動のための標準化
 - 1. 日本における書誌情報の標準化
 - 2. 図書館協力活動のための標準化 — そのあり方 —
 - 3. 書誌的データの生産と伝達に関する国際標準
 - 4. マイクロ形態資料の標準化
- b. 第1部会： 図書館の全国的ネット・ワーク
第2部会： 図書館協力活動のための標準化

第3日： a. 研究者の情報要求と図書館資料の発展

- 1. 日本の大学図書館における資料の収集・利用の現状とその背景
- 2. アメリカの大学図書館における収集活動
- b. 研究者の情報要求と研究図書館の役割
 - 1. 大学図書館の研究者へのサービスの現状と研究者の大学図書館への希望事項
 - 2. アメリカにおける日本関係資料の収集の発展と現状
- c. 図書館の施設、建築と職員
 - 1. 資料保存の効率化と施設、建築
 - 2. 大学図書館の運営と改革
 - 3. 日本の大学図書館基準
 - 4. 大学図書館基準（アメリカ）

第4日： 午前中は第3、第4の部会に別れて討議

第3部会： 研究者の情報要求と図書館資料の発展

第4部会： 図書館の施設、建築と職員

午後、全体会議で最終コミュニケの発表を採択して散会

上記の討議を通して日米大学図書館の事情の違いが浮き彫りにされたが、それらをのりこえて、次の意味のことがコミュニケとしてまとめられたことは大きな成果であった。（いずれコミュニケは字句を修正して正式に発表される予定）

1. 両国代表は現在にいたるまでの連繋の成果を高く評価した。
2. 両国代表は今次会議においても友好的、かつ効果的に討議した。
3. 両国代表は両国大学間における図書館・情報についての協力関係のいっそうの発展と、さらにこの関係が両国のみの間だけでなくさらに国際的に拡大していくことの必要性を確認した。
4. われわれはここに各部会における討議の結果を尊重するとともに、その実現のため下記の諸点について努力することを申し合わせる。
 - (1) 日米両国の図書館ネットワーク計画ならびに両国の全国的図書館計画の開発に関する情報を交換する等のための常置委員会を設けることについて準備を進めること。
 - (2) 日米両国大学図書館・情報関係者は標準化の促進のために努力しそのために必要適切な措置について検討すること。
 - (3) 日米両国は相互の国の研究を発展させることの必要性にかんがみ、非売品をふくむ両国中央・地方政府の刊行物等、ならびに、それらについての情報の交換のために、必要適切な措置について検討すること。
 - (4) 日米両国大学図書館関係者は、相互協力によって標準化の促進、技術、施設の発展をはかるため人的交流をより活発にするために必要な措置について検討すること。
 - (5) われわれは、以上の諸点の実現のため、関係各方面に支持・協力を要請するとともに、必要に応じてCULCON 図書館問題小委員会等の諸機関と協議すること。
 - (6) 今後における日米両国大学図書館・情報関係者の合同会議のあり方については、両国大学図書館渉外機関が協議し決定すること。

なお、最終コミュニケの確定章は両国代表団事務局において協議作成するものとする。

◆ 研 修

昭和 50 年度大学図書館職員長期研修に参加して

附属図書館受入掛長 田 中 一 郎

今年も恒例の長期研修が東京で開催され昭和 44 年（第 1 回）から数えて、第 7 回目を迎えるに至った。

この研修は、大学における教育・研究活動の急速な進展に伴い、大学図書館が図書館資料および学術情報を利用者に迅速かつ的確に提供することの重要性が高まっている、このため大学図書館は、利用者の高度な要求に即応した情報提供体制を整備する必要がある、その一環として、図書館の合理化と機械化によるサービス向上と情報提供等のサービスの質的改善を図らなくてはならない、したがってこれらに必要な最新の知識および技術を図書館職員に習得させ、その資質の向上を図り大学図書館の近代化を促進することを目的としたものである。

研修の期間は、8 月 8 日から 9 月 3 日までの約 4 週間で、時限数にして講義 49、演習 33 の計 82 時限（1 時限は 1 時間 20 分）である。

会場は図書館短期大学を主会場として行なわれ、その他、東京大学総合図書館、慶応大学医学情報センター、沖電気工業等であった。

参加者については、国立大学 34 名、国立高専 1 名、公立大学図書館 1 名、私立大学図書館 3 名の計 39 名であった。

本学からは、医学系分野に医学部杉尾図書閲覧掛長、人文、社会系分野に私の計 2 名が参加した。講義の科目内容については例年のとおりで別段変わったという事はないようです。したがってごく簡単に主要科目のみをここに紹介します。

講義科目

1. 大学図書館管理運営論
2. 大学図書館業務の機械化
3. インフォメーション・サービス (情報活動)

1. については、文部省国際局情報図書館課の室屋課長補佐の、“大学図書館行政”、“組織機構と管理運営”、“大学の人事管理”および“予算”等で、最近情報図書館課が採っている大学図書館改善充実の施策について論ぜられた。その中で特に強調点は現行の図書館に対する人事施策（職員間の人間関係）の重要性であると私は理解した。後に情報図書館課に対する卒直な意見、問題点について質疑が行なわれた。

2. については、図書館機械化で(1)電算機の概要とその利用、(2)図書館業務の機械化のためのシステム設計、(3)図書館業務への機械化の適用、(4)コンピュータによる書誌作成についてである。

演習は(1)については、沖電気工業で講義を受けたあと、簡単なプログラムを作成し ŌKI-TAC-4500 を使いラインプリンタで打ち出されるところまで実習を行なった。(2)については図書館短期大学でたいはん講義が行なわれ、4班にわかれて、HITAC-8210 (24 KB) システムを使用し、著者名目録の作成までがラインプリンタで打ち出される過程を見た。なお、書誌作成に関しては、情報図書館課、沙藤専門員から学術雑誌総合目録の経験を通して将来におけるコンピュータによる作成とその利用についての考察が報告され、これに対して活発な意見が受講生から出された。

3. については、人文、社会系は東京大学総合図書館、医学、生物系は慶応大学医学情報センター、理工系は図書館短期大学においてそれぞれの各専門分野に分かれて二次資料の解説、利用等に関する講義と実務演習が実施された。私は人文、社会系のグループに入り、実際に従事したことのない分野の勉強ができ、又最新の情報活動に関する動向と知識を得たことは非常に有益であった。

以上のとおり研修科目および内容をごく簡単に概略を述べましたが、何と申しましてこの約4週間、他大学の方々と交流を深めることができたのが最も大きい収穫であったと思う。詳細については大学図書館職員長期研修要綱(I)、(II) その他に記載されている。

おわりに、本研修に参加して習得した諸知識を基礎とし今後も研鑽を続け、図書館の日常業務に活用したいと思っている。

国外への文献複写依頼に関して

参 考 掛

I. 支払いに関して

文献複写等の代金支払いの仕方に「校費払い」と「私費払い」とがあります。

「校費払い」つまり国費の支出は法に基づいた一定の方法で行う必要があります。ところで文献複写等は、もっぱら相手機関の好意によって成り立っているものですから、その支払い方法は、まず第一に先方機関の指示に従わなければなりません。とりわけ殆んどが「申込」だけである国外の諸機関に対して「当方に都合の良い方法」を強いることは出来ません。従って利用者の方々が「校費払い」として部局図書室を通して申し込まれたものであっても、「私費払い」をして戴かなければならない場合が生じることがあります。

これらの点について御理解の上、あらかじめ御了承下さる様にお願い致します。

1. 外国送金小切手と申込書類とを同封すべきとき。
→「私費払い」に変更。但し取消可能。
2. 先方機関に口座を開設し、あらかじめ一定金額をプールしておくべきとき。
先方機関独自のクーポン券をそえて申込むべきとき。
→「校費」「私費」共に参考掛では扱わず。取消可能*。
3. 代金の代りに日本の文献等の送付を求めて来たとき。
→(プリント到着の場合) 取消不可。自己負担。
4. インボイスそのものが「校費払い」にとって不備であるとき。
金額の加筆訂正、紙片への走り書を等、程度のひどいもの。
→(プリント到着の場合) 取消不能→「私費払い」に変更。
5. 同一インボイスに「校費払い」分と「私費払い」分のものが一本化されて来たとき。
→参考掛ではかかる事態が生じない様に、同一機関に申し込む場合は、「申込」を全く別個のものにするなどして細心の注意を払っています。それでもなお一本化されて来た場合は、申入者の方々に「支払い区分の変更」についてお願いすることになります。

II. プリント等引き渡しに関して

1. 「校費払い」のものはプリント等到着次第、部局図書室を通して本人へお渡しします。
2. 「私費払い」のものは、部局図書室を通して申し込まれたものは部局図書室を通して、直接参考掛へ申し込まれたものは直接本人へ、いずれも参考掛が支払いの確認を得たのちに本人へお渡し致します。(国内申し込みの場合も同様)

* この制度を利用すると便利な場合があります。たとえば THE BRITISH LIBRARY; LENDING DIVISION. (主として自然科学系の資料, 230 万冊。文献複写等の要求充足率 84%) 但し, 全く個人で「申込」を行うことになります。

なお、以上の点に関し詳細は参考掛へお問い合わせ下さい。(TEL 4107)

資料紹介

昭和 49 年度特別図書購入費で購入した図書 (II)

土地経済史料 (マイクロフィルム)

主な収録書を挙げると、1. 農地制度に関する各種委員会議事録および関係資料 57 冊、2. 自作農創設維持に関する資料 40 冊、3. 耕地 (農地) に関する資料 94 冊、4. 山林野および入会に関する資料 35 冊、5. 土地慣行、小作 (永小作) 慣行に関する資料 55 冊、6. 小作争議および調停に関する資料 101 冊、7. 府県別土地・小作慣行および小作争議・調停に関する資料 183 冊、8. 米に関する資料 44 冊 (以下略。計 1,003 冊分のリール 110 本。)

以上の内容概略をただけでも日本の近代史の基礎をなす日本資本主義および日本農業構造の研究に不可欠な基本資料が殆んど網羅されていることがわかる。

これは日本農地制度の改善に一生を捧げたすぐれた学者にして農地行政官であった故田辺勝正氏が、その類まれな研究熱心さで集積して来られた成果である。氏は、大正9年本学農学部農業経済学科を卒業され、永く農林省高官として行政にたずさわれたが、かたわら『土地制度史研究』、『支那土地制度史研究』、『戦後欧州における土地制度改革史論』、『現代食糧政策史』などを著わされた。戦後は拓殖大学教授、農地調査会副会長を歴任され、昭和38年に惜しくも亡くなられた。北大ゆかりのこの高名な学者の、このコレクションを後輩たるわれわれが充分活用して、この分野での研究の前進に貢献することが可能となったことは、喜ばしいことである。

壬 生 家 文 書

本書は、平安時代以来、代々朝廷の財政関係の行政、事務をうけもってきた壬生家（太政官厨家という）にかんする文書である。同文書の原本は現在宮内庁書陵部に架蔵されているが、今回は同部の許可をえてその写真版で全巻購入することとなった。性格上、同文書の中には平安～江戸に至る間の朝廷の経済構造を示す太政官符、訴訟関係文書、譲状等貴重でかつおびただしい数の史料が伝えられており、この史料を生かして本格的な研究がなされるならば、従来荘園、武家領の研究の割りにおくられていた中世における天皇家、朝廷の果たした社会史的役割を究明するうえに、いくたの豊富は素材を提供すると思われる。日本における天皇制の役割を古代から近代に至るまで一貫した問題として捉えようとする姿勢は、近年の日本史研究のひとつの動きといえることができるが、天皇制支配がもっとも弱体化・空洞化したとされる中世・近世において、その実態をつきとめようとするとき、この文書群が、かならずや貴重な素材を提供するものと考えられる。

Actas Kantiana（カントの時代）

Actas Kantiana（「カントの時代」）は、123名の思想家の著作314表題400巻を出版する計画で1968年に刊行が開始されたが、いまだに完結していない一大思想叢書である。

ここに収録されているのは、カント、フィヒテ、シェリングなど、その全集が刊行されている数名を除き、カントと同時代に活躍し、その原著がドイツ各地に分散し、その体系的研究が不可能であった人々である。したがって、メーリンの『批判哲学百科辞典』11巻など、当時の思想形成に寄与した人々の文献を複写により集大成したこの叢書は、カント批判哲学研究のための宝蔵であるとともに当時のドイツを中心とした思想運動の展開と思想の社会への浸透過程を解明するための貴重な資料である。今回備えられたのはそのごく一部50巻であるが、完備した暁には当図書館の誇るに足る収集文献になるであろう。

ソ シ オ ロ ジ（社会学）

わが国における社会学関係の主要な定期刊行物は、日本社会学会の機関誌「社会学評論」を別として、東北社会学会の「社会学研究」、日本大学社会学研究室の「社会学論叢」、および「ソシオロジ」がある。ソシオロジは京都大学文学部社会学研究室に編集委員会事務局を置く社会学研究会の同人誌である。創刊以来23年を経た今日、会員は全国各地に拡がり、年3回刊行され、60号を数えるまでにいたった。本誌の内容は社会学に関する研究論文、研究ノート、海外文献の紹介、書評、学界の動向などを盛り込み、学会の機関誌とほとんど変りはないが、特色としては、「釜崎実態調査報告」、「鳥取県における一漁村の実態調査」、「山村の

実態調査」など特定地域に関する実証研究の成果の特集を含んでいることである。戦後日本における社会変動のみならず、社会学研究の足跡を把握するうえにも不可欠の文献である。

日 本 大 蔵 経

老大な仏教の聖典の集成を「大蔵経」「一切経」などとよぶことはよく知られているが、史上、大蔵経の編纂や刊行は何度も行われた。明治以後の日本では『大日本校訂訓点大蔵経』（明治38年完結）が㊦字蔵経とよばれて広く用いられ、ついで中国選述の典籍を中心とする『大日本統蔵経』（㊦統蔵、大正1年完結）が編纂刊行された。さらに『大正新修大蔵経』（昭和9年完結）が完成して、仏典の閲読は容易になり、日本の仏教研究の基礎が築かれた。『大正新修大蔵経』は、日本選述の文献も広く収めていたが、日本仏教の文献は広汎にわたって老大な量のものが残されており、その編纂と刊行が企てられた。『日本大蔵経』（大正10年完結）と『大日本仏教全書』（大正11年完結）が、そうした企てを代表する二つの大きな事業であった。『日本大蔵経』は、日本であらわれた代表的な仏教典籍を公開されていなかったものまで広く集め、その中には近年注目されはじめた修験道関係の典籍なども改められている。今度再版されるに当たって、旧版の48巻を96巻に編成しなおし、本文を増補したり、禪宗章疏など新しい部門も加えられた。また旧版以後50余年の研究成果にもとづく新しい解題3巻、目録、索引1巻を加えて全100巻となった。

『大日本仏教全書』は、教団、寺院、僧伝などの史料を多く収める大叢書であるが、これも先年、同じく鈴木学術財団から新編成の再版が刊行された。この二つの叢書の新版が北大図書館に加わったことは大変よろこばしい。なお、北大図書館と文学部には旧版も架蔵されている。

年 譜 叢 書 （中国歴代名人年譜彙編）

第1輯全61冊・台北広文書局編刊（71年）中国では、宋代以後、ことに清代に入ってから続々と年譜が作られるようになった。生前本人が自編した「自訂年譜」を始め、門人が編んだもの、後人の編んだものなど、さまざまなそれら年譜の目録は、本国でもこれまで何種か編纂されており、近年の倉田淳之助氏らによる『歴代名人年譜目録』（51年）のごときは、採録譜主の総数だけでも1,018人に上る。ある人の年譜の有無はこうした目録によってほぼ検索するが、なかには実物の見難い場合も少くない。その種の困難を解消するため、既成の年譜を影印集大成しようと企図したのがすなわちこの「年譜叢書」である。

第1輯61冊には、清代を中心とて明末から民国初年にかけて活躍した「名人」——有名人のうち、官僚・学者・文学者などおよそ百家の年譜100種をおおむね歿年順に分収し、うち第1分冊を「例略」に充てて、目録・譜主略伝・索引を収めている。「名人」で2種以上の年譜がありながら、裁権のように採られていない人物もあり、王国維の場合のように1種しか収められていない例も見受けるものの、いずれ網羅されるに違いない。したがって、伝記研究の有益な基礎資料として続刊が待たれる。

Bulletin de Correspondance Hellenique （ギリシャ研究機関誌）

このたび、フランス学界の古代ギリシア史研究の最も基礎的なこの雑誌（通常 B. C. H. と略称されている）が、1877年の創刊号から1951年の第75号まで、本学中央図書館に備えられた。（但し残念ながら現在絶版中の8, 10, 11, 12, 46, 53, 61の各号を欠いている。）

本誌の最大の特徴は、フランスの古代史家たちがみずからギリシャ各地で遺跡発掘事業にたづさわりの、考古学的な研究成果を綿密に公表し、且つ出土品中最も貴重な「碑文（金石文）」を、入念な考証（歴史学と言語学の両面から）を付して報告しているところにある。フランス学界が最も力を傾注してきたのは「アッティカ」のみならず「デロスとその周辺」及び「デルフォイ」更にまた「ポイオティア」「アルカディア」や「マケドニア」「テッサリア」の各地方であり、殊に、デロス島やデルフォイの歴史が今日はっきりしてきているのは、実にこの雑誌 B. C. H. の報告を通してのことなのである。また、「アルカディア」と「ポイオティア」出土の碑文に関する数多くの論文は、単にこれらの地方の歴史の解明に最大の寄与をなしたばかりではなく、古代ギリシャ方言研究の分野で言語学者にとっても貴重なものである。

われわれは創刊号から本誌をひもとくことにより、19世紀70年代から現在へと通ずるギリシャ史研究の進展そのものをも辿り得ることとなる。

本学図書館に本誌の備えられたことを心から喜ぶと共に、なんらかの手段による絶版部分の補填と、更に、1952年以降今日に至る部分の備え付けを切望する次第である。

**Archiv für Strafrecht und Strafprozess. Bd. 1-88: Heft 3 with
Register to Bd. 1-53.** (刑法, 刑事訴訟法雑誌)

本資料は、ゴールドダーマ・アルヒーフとよばれる「刑法, 刑事訴訟法」雑誌でドイツ刑法学の旧・新派対立の旧派に属しミッテルマイヤー、ブリーらがその編纂に加わり、ドイツ刑法研究の基本文献である。

**Bulletin de la Fédération Jurassienne de l'Association Internationale de
Travailleurs. 1872-1878.** (国際労働者協会「インターナショナル」ジュラ連合会報)

本誌はネットラウの「文献資料」に収録されているもので、スイスのジュラ地方の小都市で6年間発行され編者にジャムギョーム、主な協力者にロバン、クロボトキン、マロンといったアナキズムの指導者達を擁してバクーニン主義者の最も重要な機関誌となった。

スイスのジュラ連合はバクーニン派の最も有力拠点であって、このビルティンは、インターナショナルの歴史、19世紀の労働運動史、政治研究に不可欠の資料である。

**A Legislative History of the Securities Act of 1933 & Securities Exchange
Act of 1934. Vol. 1-11.** (米国証券法, 証券取引法制定資料)

本資料は、現行証券取引法の制定に至るまでの、アメリカ上院、下院における公聴会の記録、議会における大統領の意見および議事録、議会に提出された法案、改正案等、当時のアメリカ議会の証券法および証券取引法に関する記録の全貌である。

Minnesota Law Review. Vol. 1-54. (1917-1970)
(ミネソタ大学法学雑誌)

アメリカ合衆国中央最北部のミネソタ州の代表的な法律誌であり、すでに半世紀以上の歴史を有し、抽象的法理論よりも法律実務との密接な関連における興味ある諸論文、解説が多い。アメリカの法学雑誌を多く殆んど網羅的に重要なものを所蔵している北大図書館に、本誌の購入は有益な充実をもたらすものである。

◆ 受 贈 図 書

本学教官の著作物

〔本 館〕

法 学 部

五十嵐 清 民法学の基礎知識 (1)~(3) (有斐閣)
 小 山 昇 現代法律学全集 22 民事訴訟法, 改訂版 (筑摩)
 小 山 昇 同 2 訂版 (〃)
 中 村 睦 男 教材憲法判例 (北大図書刊行会)

経 済 学 部

佐 藤 茂 行 プルードン研究—相互主義と経済学 (木鐸社)

文 学 部

佐 伯 有 清 古代氏族の系図 (学生社)
 佐 伯 有 清 ヤマタイ国とヒミコ (ポプラ社)

◇ 人 事 往 来

新図書館委員

菅 原 照 雄 (学生部長) 50. 6. 26 付

配 置 換

千 葉 哲 夫 整理課総務掛長 (釧路工業高等専門学校主計掛長) 50. 7. 16 付
 佐 藤 忠 勝 医学部用度掛長 (整理課総務掛長) 50. 7. 16 付
 五十嵐 哲 郎 教養分館閲覧掛 (整理課受入掛) 50. 9. 16 付

◇ 訂 正 No. 38 (一 が正しい)

5 頁 下から 10 行目 H. セーを J. B. セーに, 歴史約評注を 歴史的評注に

9 頁 昭和 49 年度部局別図書, 雑誌受入冊数中, 薬学部の洋書購入 (雑) 8 を 330 に, 合計欄 8,690 を 9,012 に,
 同じく洋書寄贈 (単) 330 を 8 に, 合計欄 2,152 を 1,830 に訂正願います。

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻 39 号)

1975 年 12 月 10 日 発行 発行人 齊 木 一 郎

編集委員 坂東 慧 (長)・横山梅雄・石川雅夫・宮部 徹・千葉哲夫・田中一郎
 似鳥正吾・徳田洋一・坪田充弘・山本幾夫・高橋 裕

発 行 所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 電話代表 711-2111 (2967)

印 刷 所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560-5561